

第43回新日美展特集号



168号

新日本美術協会

事務局

横浜市港南区港南台

1-39-5

鈴木忠義方

TEL.045-832-0504

編集委員

石原修

篠光定

早田美智子

小高峯夫

湯澤朱美

原稿常時募集

次号令和2年2月予定

第四三回新日美展を終えて

実行委員長 小高 峯夫



小高 峯夫

額せざるを得ない状況がありました。

結果、総応募数は三〇〇点弱で、昨年比三〇点減でした。

作品の傾向は押し寄せる高齢化と一般趣向変化で三〇号以下の小品、且つ水彩画の割合が増加しています。

当会では厳しい状況ではありませんが、文化高揚の一端を担う団体として、会期中恒例の芳賀先生のギャラリートークをはじめ湯澤委員の切り絵、飯村委員の剪画ワークショップ、張委員のデッサン実演を実施し入場者との交流を行いました。

そうした結果、入場者数は六〇四八名と昨年比六七三名の増となりました。

次回展に向けて今展の総括と反省を行い、改善を加え新たな活動に移らなければならぬと思います。

九月二〇日搬入日、果たしてどれくらい作品が出品されるか心配されました。この夏酷暑で厳しい作品制作を余儀なくされ、加えて消費税アップ等で出品料も増

講評

美術評論家

中野中先生

四三回展という歴史を有すれば、伝統というものが出来てきます。そこで「伝統と革新」という事がテーマになってきます。

「伝統と革新」というと相反しているように思いますが、そうではなく、伝統があるから革新が出来、革新を行うから伝統が今に生きていくという事です。

具象、抽象という事にはこだわりませんが、想定内の仕事の中で「上手く描けたな」、「良く描けたな」という評価になりがちです。

“こういう視点は持ち得なかつたなあ”、“こんな捉え方は新鮮だなあ”というようなことがもつとあって良いと思います。

新日美展に入選、入賞され、ご縁を持たれた方々、多くの人に見て頂いて、生き方の違い(物の見方、感じ方、考え方等)を吸収して、一人でも二人でも心を揺さぶる人が現れるような作品を期待しています。(表彰式での挨拶より)



中野中先生

講評

元東京造形大学教授

芳賀文治先生

受賞された作家の皆さん、誠にありがとうございました。

今日は工芸についてお話ししたいと思います。工芸は技術が優先します。技量が作品表現の基礎(基本)になると思っています。

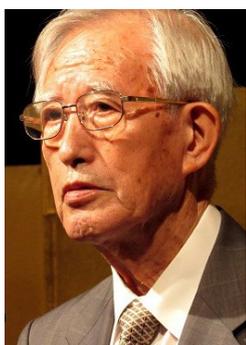
その技量を駆使して自分の思いを表現(発表)する、と考えています。技量を駆使した作品が品位、格調のある作品になります。

工芸部門の品位、格調というのは非常に難しいものですが、その芸に到達するというのが大事な事です。

日本の伝統工芸に「竹の芸術」、「木材工芸」、「金属」、「漆」等がありますが、技量の修練というものが基本になっています。

しかし、伝統工芸は制作時間が掛かるものが多く、携わる作家が少なくなっているのが事実です。

工芸部門に出品される方は、作品を継続して出品して戴きたいと思えます。(表彰式での挨拶より)



芳賀文治先生